
いつわって？カレカノ！

レオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いつわって？カレカノ！

【Nコード】

N0175BA

【作者名】

レオ

【あらすじ】

よくモテる圭吾と音々が偽り彼かのに?!
二人は幼馴染、おまけに音々なんて男勝りすぎて
もう周囲は混乱?!
ドキドキツバツバタツのラブコメデーーっ！

第1話

「あ、あの・・・！ボクと付き合ってください！」
「・・・・・・・・」

世の中、不吉なものだよな。

なんだって、あたしは今一度も会話したこと無い男子に告白なんてされてるんだろう・・・。

「あの・・・君、誰？」

「あ！えと、僕は、2Aの本田と言います！」

「本田・・・君・・・(?)」

いや、まじで誰。

2Aって・・・かなりの賢いお方がいらっしゃるクラスだよな。

「・・・ごめん、知らないし興味ないし、なんか、ごめん」

我ながら酷いとは思うけどさ、こういう振り方じゃないとあきらめてくれないだろ。多分。

あたしはスタスタと自分の教室に戻る。

今は放課後。そしてあたしは日直。

ああ、だりい。んでもって・・・

「寒い！」

今月は冬まっさかさりの11月。

そして今は11月下旬。

はあ・・・はやく学校おわんねえかなー。

ここは公立森羅学園。

その2D生徒、井上音々（いのうえねね）。

成績は2Dの中では上のほうの人材。（それでもほぼオール3）
所詮は2D。一番アホのクラスだから、しゃあないわな。

教室の前まで来ると、中から話声が聞こえた。

『あ・・・あの・・・圭吾君!』

『こんな放課後にどーした?』

圭吾?と・・・誰だ?

『わ、わたしと!付き合って、くれませんか?』

また可愛い声の子女の子だな。

多分2A?B?C?の女子だな。つか・・・2Dに女子いねえしな・・・うん・・・。

『んーごめん、俺今そういうの興味ないんだわ。ごめんね』

『えと、じゃ、じゃあ!お友達・・・から・・・』

『ごめん、俺お堅い女の子とはあわねえの。』

『え、でも・・・!』

『もういい?俺、課題のこってんだ』

『・・・圭吾君のバカ!』

そういう声とともにドアがいきなり開いて
その告白をしていた女子は去っていった。

あたしは教室に入って、圭吾に声をかける。

「これまた酷い振り方だな」

「あれ。聞いてたのか?」

「まあね。あたしもさっき告白されたばかりだから。」

「お前もまたなんだな。で?結果は?」

「もちろんふったっつーの」

「だーよなー。てか、お前の振りかたもどうせ大概だろ」

「まだまだろ。『ごめん、知らないし興味ないし、なんかごめん』
って言って

帰ってきただけだから大丈夫だろ」

「いやいや、かなり酷いと思う。俺ならなくぜ?」

「しらねえっての。はあ・・・告白なんてもうまっぴらごめんなん
だけどー。」

「だーよなー・・・あ、俺!ちよつといいことおもいついた!」

「は？なに？」

あたしは自分の席について、頼まれた資料閉じをはじめる。

「俺ら、付き合おうぜ！」

「・・・はあ？」

「大丈夫。い・つ・わ・り！の彼かの！だからさっ」

「・・・はあ・・・？」

「え、きにくわねえ？」

まあ・・・そりゃ気に食わないけど・・・

だって、幼馴染の圭吾とあたしが付き合う（いつわりでも）とか

なんか、気がひけるんだよな・・・

いやまあ・・・でも、適作かもしれないな・・・

「よし。のった。これで断る口実ができるもんな」

「よーっし！決定！俺らは偽り彼かのっ」

「よろしく！」

こんな感じでできた偽りカレカノのあたしたちの関係。

相手は幼馴染の森羅圭吾^{しんらけいご}。同じく2Dのアホ。

てか・・・

「ちょ・・・とにかくさむいんだけど・・・」

「課題終わらせてさっさとかえろうぜー」

「だなー・・・。って、あたし課題じゃないし！お前だろ」

「まあまあ。」

第2話

次の日。

あたしたちはいつでもどうり二人で登校。

まあ・・・家が隣だから仕方が無い事だと思う。

だって、家から出るタイミングまでも一緒なんだよ・・・？

「ういーっす、おはー」

「おはよー。ふぁ・・・眠い・・・んでもって寒い。」

「お前昨日から寒いばかりってんじゃない。大丈夫かよ」

「まあ・・・大丈夫なんじゃね？多分ー」

「ま、ならいいけど。てか、その男口調いい加減直せば？」

「はぁ？んなだること、なんでしなきゃなんないの」

「いや、なんとなく。あー、なんでんなの好きになるのがいるんだか」

「うっさーい。圭吾だってわっかんねーよ」

「まあな。おっ・・・と。俺らそういえば恋人同士なんだっけ？」

「ああ・・・そういえばそうだったな。普通にしていればいいよな？」

「んー・・・それじゃだめなんじゃね？」

「えー。じゃあどうすんの」

昨日まで幼馴染だったやつとカレカノの振りでもしろって言われて誰ができるんだ。そいつ今すぐ俳優に売れ、って話だよ。

「こういう感じじゃね？俺前付き合ってたときこんな感じだった」

そういうと、圭吾はあたしの手を取って指を絡めた。

ゆわる、手をつなぐと言う恋人らしい行為。

「へえ・・・。あたし付き合ったことないからわっかんねー」

「だよなー。所詮音々だもんな。所詮。」

「うっせー、ほら、学校近づいてきたぞ」

「恋人らしく・・・って言ってもさらっとな、さらっとな」

「別にいつもと普通にしとけばいいんだろ？あたしは。」

「まあな。俺が誘導するから心配すんな」

「・・・信用はできねーけどまあ、信用してやるよ」

「うわ。かわいくねーの」

「前からだっつのー」

門をくぐり、教室に向かう。

さすがに周りの視線がかなり刺さる。

まあ、そりゃそうだろう。

この学園のNO1にモテてる男女が手つないで歩いてんだよ？

そりゃみんなこっち見るだろ。

ちよいちよい聞こえる周りの声にあたしはイラッとした。

「なによ、あいつ。圭吾君と手つないじゃって！」

「圭吾くんも圭吾君よ！昨日あたしを振っというて・・・！」

ああ・・・昨日ふられた女子か。

ご愁傷様でした。

こっちは男子の声。

「圭吾のくせにして・・・！なんで音々と！」

「2Dの大事な女子なのになあ？！」

なにか大事な女子だよ。

いつも手荒に扱うくせに。

「なあ、走っていい？」

「は？」

「あたし今すぐにでもこの状況から逃れたいんだけど。」

「ああ、まあ俺もそれは一緒だ。んじゃ、走るか」

ダダダッと走っていくあたしたちを回りは呆然とみていた。

どんだけものめずらしいんだよ。

教室に入ると、いきなり男子たちに囲まれる。

「お前ら付き合ってたって！？」

「告白したのは音々とか！」

「初キスはもうすんだとか!」

「なんだよーっ! じゃあHもおわったのかあ?!」

「てかいつからつきあってんだよーっ」

・・・・・・。

どっからんな噂が回った。

誰だ。回したやつ。

いますぐぶっ飛ばす・・・

かなりプツチンきてると圭吾が耳元で

「切れるな。俺もかなり我慢してるから。」

と言いつつ、男子たちの話にあわせた。

「そうだよ、付き合ってるの。まあ幼馴染だしなあ?」

「告白はどっち?」

「残念ながら音々じゃなくて俺だよ」

「初キスは?! したのか?!」

「まだだよ、あほか。昨日付き合い出したのに」

「じゃあHもまだ?」

「・・・てめえぶっ飛ばすぞ?」

ケラケラと笑いながら席に着く圭吾を見て

あたしはため息をつく。

どーやったらあんなけ気楽に生きられんのか。

さっぱりわかんねえの。

頬杖ついてぼーっとしてると、不意に頭の上から声がした。

「ねえ、ほんとに付き合ってるの?」

この声は・・・昨日の圭吾に告白してた女子か。

「ほんとだよ」

「じゃあ証拠みして」

「はぁ・・・?」

「付き合ってる同士なら、キス、できるでしょ?」

・・・この女、なにいつてるつもり？
キス？圭吾と？

は・・・んなのありえないんだが・・・

「ねえ？圭吾君。」

うわ。わざとらしい。

「っ・・・できるにきまってんじゃん？」

一瞬つまったものの、圭吾は普通に答えた。

いや・・・できないだろ。

つか・・・あたしその場合ファーストキスは圭吾ですか？

「じゃあ、いまやってよ。」

「わあったよ」

圭吾はかったるそうにこっちにきて
あたしの耳元でささやいた。

「ファーストキスいただきます？」

うわ・・・腹立つ・・・

てか・・・いつわりの恋人なのに

ここまですないといけないんだ・・・？

そんなこと思っていると、目の前に圭吾の顔がきて
唇に体温を感じた。

ファーストキス・・・ね・・・。

圭吾はきつとファーストキスなんかじゃないんだろうけど。

ま・・・所詮あたしだしな。

いつのまにかキスは終わっていて

周りの男子は啞然としていて

もちろんいいだしっぺの女子も啞然としていた。

「ほんとに・・・したの・・・」

「やれつつったのだれ」

「・・・圭吾君のバカ！」

その女子は教室を出て走り去っていった。

「・・・おれ二日連続でバカっていわれたんだけど。」

「まあ、所詮圭吾だししゃあないだろ」

「なっ・・・しっけいな。」

「あらごめんあそばせ、本音がでてしまったわ」
「きもちわりい」

「・・・」

正直今のあたしに女口調てのはわっかんね。

でもいつか、女口調になってみたいかも・・・。

「どうした？」

「いーや、なんでもねえよ」

第3話

時間は淡々とすぎて、もう4時限目。

4時限目はあたしの大嫌いな英語。

基礎の英語は覚えてるものの

ほかの英語なんてなにがなんだかさっぱりなんだよ。

「ふア・・・眠い・・・」

ちらつと圭吾を見ると、すでに爆睡・・・。

いや、はやすぎんだろ、あいつ。

ああ・・・でもあいつ3時限目の数学から寝てたっけ？

まあどーでもいいんだけど。

英語の先生はかなりお人よしで

寝てるやつがいようと、落書きしてるやつがいようと
起こさない。お人よし・・・っーか弱い？

「えーっと、じゃあ、これを訳してもらうのは・・・
音々ちゃん！お願いします」

「えーっと・・・わかりません、すみません。」

「あらあら、いいのよ。これはね――」

この人はどこまでお人よしなのだろうか。

少しぐらい怒ればいいのに。

そんなことを考えてる間に

チャイムはなり、昼休み。

「圭吾、学食の特製たっぷりイチゴパン売り切れんぞ？」

「ん・・・は！やべええっ！！！」

全速力で教室を駆け抜け、圭吾は売店に向かう。

はあ・・・あたしも今日は弁当ないんだよな・・・

「だり・・・つかさみ・・・」

トコトコと売店に向かおうと廊下を歩き出した時だった。

「ねえ？あなたがあ井上音々え？」

目の前にあられたのは、これほどブリブリしたやつはいないであろう変質者・・・じゃなくて、ブリブリした女子がだっていた。

「はあ・・・。あたしが井上音々ですが、なにか？」

「あなたあ、圭吾くうんとおつきあってるんですってえ？」

・・・んだよ、またこうゆうやつらかよ。

だりい。うつとうしい。

「そうだけど。」

「ふうくんう・・・。どおせえ、あなたがあむりやりいやったんでしょお？」

「は・・・？」

「そおんなんだったらあわたくしにいけいごくうんをおゆずつてもらえなあい？」

・・・ユズル？ゆずる？譲る？謙？

「ゆずるって・・・なにが？」

「だあかあらあゝ圭吾くうんをおあたしにちよおだあいつてことお」

「いやだから・・・」

あたしが言おうとしたとき、不意に後ろから声がしてがばつと抱きつかれた。

「てめえみたいなんに誰がいくかよ。ばっかじゃねえ？」

「?!」

圭吾だ。後ろから抱き着いてくるのはよくあるけどさすがにこのタイミングはびっくりした。

「圭吾くうくん♪」

「きもい、ちかよんな、ブス」

「なっあ・・・?!そ、そんなことお言っていいっておもってるのお？」

「うん、余裕で思ってるけど」

「ふうりん、まあ？あたしはわあ、この学校にいられないことをお
もっておくのねえ」

「へ？なんで？え、もしかしてお前のおかんが権力持ってるからと
言う

どうでもいい？口実？え？だったらかなり無駄だよな。」

「な、なあんですうってえ？」

「だって、俺、理事長の息子だし。」

「はっ……！」

今気づいたのか、この女子。

そう、圭吾はこの森羅学園の理事長、森羅初世しんらはつせの息子。

まあ、Ⅱだな。圭吾はかなりの権力者ってわけだ。

時期理事長ってわけじゃないらしいけど。（圭吾の頭じゃ理事長な
んてつとまんねえしな）

「じゃ、じゃあわたくしはこれで……」

「ブス、これで終わると思うな。」

「ひっ……！」

そのブリブリ女子はものすごいスピードで去っていった。

「モテる男はつらいな」

「……お前も気をつけろよ」

「は？なにを？」

「なんでも。とにかく気をつけろ」

はあ……？

なにを気をつけろと？

まあ……圭吾が言うんだし……

「ん……了解」

第4話

「やべ・・・売店いきそびれた・・・」

変なブリブリ女子に引き止められたせいで
売店はいきそびれてしまった。

外のコンビニでもいくかあ・・・？

「ん、これ。」

そんな短い言葉とともに

圭吾が隣からマヨパンを差し出してきた。

「え？いいのか？」

「音々のために買ってきたんだし」

「ラッキーツ！圭吾まじ好きだあ」

そんな恋愛感情なんてものは1滴も混ざってないけど
周囲からはひやかしの声でした。

「ラブラブだね」

「さすが幼馴染」

「くう・・・！圭吾にぬかされるとはなあ」
・・・。

なにがラブラブだ。

さすが幼馴染って・・・

なぜさすがなのか？

そんなことを思っていると、ポケットで
ケータイが震えた。メールだ。

件名..津田です。

本文..放課後体育館裏に来てください。

大事な用があります。

はあ・・・また告白かなにか？

ま、断る口実はあるわけだし・・・
てか、こんだけ噂広がつて、よく告白なんてできるな？

「どうした？」

「また告白の場所掲示メール」

「え？まじで？」

「うん、まじで」

「・・・行くな」

「は？なんで」

「・・・っつ！トイレエエエ！」

圭吾はあたしの質問には答えず

トイレに疾走していった。

「??」

放課後、体育館裏にあたしは行った。

行くとそこには誰もいなくて

シーン・・・と静まり返っていた。

「呼び出しといていないとか・・・」

ありえねえにもほどがあるんだけど。

そんなことを思っていると、不意に後ろか人の気配をかんじた。

ぱっと後ろを振り向くと、そこには誰もいなかったが

さっきまで前を向いていた方向から人の声がした。

「音々さん、来てくれたんですね」

そっちを向くとそこには、かなり長身の男子が立っていた。

んー・・・余裕で185超えか・・・

「呼び出されたしな」

約束は守るのがあたしのルール。

「おれ、べつに音々さんをだましたいわけじゃないです」

「は？」

いきなりわけのわからないことを言われて

おもわず思ってることを口に出してしまった。

と、いつでも「は」だけだけど。

「けど・・・圭吾さんと付き合ってしまった以上俺にはもうこんな方法しかないんです」

「いや・・・だから、なに・・・?!」

最後までは言わせてもらえず

後ろから誰かに口を押さえられ

あたしのまぶたは重くなり

閉じたくもないまぶたを、閉じてしまった。

第5話

「ん……」

目を開けると、そこは何処かの倉庫らしきところだった。そういえばあたし眠らされたんだっけか。

はぁ……めんどくせー……

今の状態は最悪だ。

口もテープで閉じられてるし

手も手錠をかけられていて

足もロープで縛られている。

とりあえずあたしは、周りを見て

この手錠を解けそうなものをさがした。

ねじでも針金でもなにかあれば解けんだけど……

端っこのほうにねじがコロンと落ちていた。

ちっこいけど……まあ、だいじょうぶか。

カチカチカチと手錠の鍵の差込のところを探る。

カチッ

「ん……ん……（よー……し）」

手錠が解けてあたしは、テープとロープをそそくさと外した。と、同時に倉庫のドアが開く。

「あれ……といちゃったんですか？」

「ああ。あれ、息苦しくてな。SMプレイにはちときつすぎんじゃないね？」

「そうですか、すみません。でも、もう一度あの状態になってもらいます」

「は？ いやにきまってんじゃない」

「無理です。・・・圭吾が来るまで、無理ですよ」

ニヤリと笑うこいつになにか違和感を感じた。

あ・・・

「お前、もしかしてあの、えっとー・・・圭吾に告白した女子のー・・・」

「そう、元彼だよ。圭吾は俺の憎き相手。音々さんと付き合ってるなら

愛する彼女を助けにこないわけないでしょう？だから、そこを
ビリビリッとやるわけです」

・・・バカだ、こいつ。

圭吾がそんな単純にやられるわけもないし

第一、あたしたちは偽りのカレカノ。

助けにくるはずもない。所詮、幼馴染だ。大好きな、友人、親友だ。

「てか・・・圭吾なんていらなくてもあんたぐらいなら

あたし一人で十分だけど？」

あたしは手をポキッとならせる。

「さすがに、先輩だからと言って負けませんよ。女なんかに」

「あたしを女だと思ってる時点でお前の負けだ。」

その言葉の終わりと同時にあたしはそいつの溝に思いっきり蹴りを
入れる。

その足をつかまれるものの、思いっきり振り払い、一回宙返り地面
に着地した。

「っ・・・」

あたしはすぐにしゃがみこむそいつの上に行き、足を上げる。

「いい？頭に、一発入れても？」

「・・・入れてみる。入れればいいじゃねえか！」

「と・・・。ごめんだけど、あたし後輩をいじめる趣味はねーの」
足を下ろして、あたしもしゃがみこむ。

「あたしのケータイ、どこ？」

「・・・はい。」

そいつは自分のポケットからあたしの黒のケータイを取り出す。それを受け取ってあたしはただちに圭吾に電話をかけた。

『もしもーし？音々、どうした？』

「ちよつとあんたに用があるかわいい後輩がいんだけど今これる？えつとーここは、〇〇工場近くの第2倉庫だと思うんだけど」

『ん、わかった。んじゃ』

「じゃね」

プチッ

「音々さん・・・何してるんですか・・・？」

「圭吾よんだただけけど？」

「は！？な、なんでんなこと！」

「あんた、圭吾の話たかったんだろ」

「・・・そうですけど。それ、俺にしか利益なくないですか？もしかしたら殴り合いの喧嘩になりますよ？」

「大丈夫。殴り合いの喧嘩はぜってえあんたが負けるから。」

「・・・」

5分ぐらいして、圭吾が倉庫に「しつれーい」と言って入ってきた。

どこまでもお気楽なやつだ。ほんとに。

「んで？俺と話したいやつって？」

「そこにいるやつ」

「あれ、津田じゃん」

「どーも・・・圭吾先輩・・・」

「え、なに？俺に用って？」

「・・・なんで、真知子振ったんだよ・・・」

「へ？」

なんつーすつとんきような声だ。

「なんでってきいてんだよっ！」

津田ってやつが放ったこぶしを圭吾は普通に片手で止めた。

そして、そのこぶしをつかんで思いっきり投げとばす。

「いってっ……」

「真知子ってやつ、お前のかのじゃねえの？」

「……もとかのです……」

「おれ、あいつがよく図書室にいのしってたけど

ずっと窓からサッカー部の試合のぞいてほほえましそうにしてたっ
ての」

「……そう……なの……か？ い、いや、でも、それは俺を見
てるんじゃないくて……」

「あんたをみてたんだよ、多分。だって、圭吾は今足壊してて試合
には出てない」

「……わけ……わかんね……！」

「まあ、もういちど真知こ？ だっけ？ って人に気持ちつたえるん
だな」

「俺にほれたのは多分なにか八つ当たりのな感じだったんじゃない？」

「そんじゃ。いちいち拉致していただきありがとうございました」

あたしはたったかとかからかに倉庫を出て行った。

第6話

「ちょ、音々！まてって！」

「はぁーいいことしたなあ」

「いや、そりゃいいことはしたけど拉致って?!おい！」

「さーてとー帰ったら何すっかなー」

「おい！人の話聞けって！」

「ー……。なに。」

「いや、なにじゃなくて。拉致ってなんだよ？」

「そのまんまだろ。拉致られたんだよ。体育館裏に行ったらその津田ー……。とかいうのが来て

んでまあ、かくかくしかじか」

「だから俺はいくなくって言ったのに」

「あれ、そういういみだったわけ？」

「……。うん。」

「あー……。それは、そのー……。うん、ごめん」

「べっつにいいけどな。終わりよければすべてよし。

音々が無事なら全然いいから」

「おー。圭吾にしてはいいこと言うじゃん」

「えへへーそうだろうって、俺の言葉は毎日名言だったの」

「うわ、こんなところにナルシストがいる」

「なっ……。俺はナルシストじゃなくてだな……。」

「間に受けてる圭吾はこの世で一番のバカだな」

「……。」。」

知らない間に家に付いていた。

「それじゃ、またあしたー偽りの（笑）ダーリン（笑）」

「おまつ……。笑いすぎだろ！」

「だーっとおもしろいんだもん」

そんなことを言いながら、あたしは家に入った。

「ただいまー」

「あら、おかえり。おそかったわね？」

「うんー圭吾と遊んでたー」

「いつまでも仲がいいわね」

「まあなー。あれ、るかは？」

「ああ、なんか上でさがしものしてるわよ」

「はあ・・・？」

井上るか、中学3年生のあたしの弟だ。

るかは年下の癖にあたしより背が高い。

頭一個分ぐらいはな・・・。

2階にいつて、るかの部屋をのぞくと

えぐいことに、部屋が空き巣にはいられたかのように
ぐっちゃぐちゃだった。

「るか、お前なにがしたかったんだ・・・？」

ベットに丸まって壁の方向を向いてるかをつつきながら
問いかけるものの、ぐすんというまあ泣いてるであらう声？しか聞
こえない。

「るーかー。」

「・・・姉ちゃんにもらったキーホルダーなくした・・・」

「は。？」

キーホルダー？

ああ・・・確かなんかのイベントで小さい頃
るかに作ったキーホルダーか・・・

「どこさがしてもない・・・」

「はあ・・・そんなことでめそめそするな。」

ほら、あたしもさがすから」

「うん・・・」

るかは小さい頃から泣き虫で

今では長身でかなりのイケメンの癖に
泣き虫だからすごいギャップだ。

弟はあたしのことが大好きみたいで

あたしがあげたものとか、すぐく大事にする。

まあ・・・あたしもかなりかわいがってるけど・・・

「この中探した？」

一つの透明のボックスを指差すと

るかは首をふりながら

「透明だしないだろ・・・」

と半泣き状態で言った。

「はあ・・・るかの頭はまだまだ甘いな。」

そういつてそのボックスをあけると

端っこのほうに、あたしがつくったキーホルダーがあった。

「あ、あった！」

「ほらな」

「姉ちゃんありがとーっっ」

るかがあたしをぎゅっとする。

あたしは全身すっぽりとるかにはまる。

「はいはい。ありがとう」

るかはあたしを離すと、ニコニコしながら

これまたあたしがあげたリスが書いてあるかんに

大事そうにいれた。

部屋に戻ってベランダを見ると

そこにはさむそうに（いやがちでさむい）たっている圭吾がいた。

手にはノートとシャープペンシル。

あたしは急いでベランダを空けて、

「なにしてんだ?!」

と声をあげた。

「い．．．いや．．．宿題を．．．」

「とりあえず入れって。風邪引くぞ」

あたしは圭吾を中に促すと

タオルケットを肩からかぶせた。

「んで？宿題が？なに？」

「．．．教えて．．．」

「．．．そんなことでベランダに？」

「うん．．．20分ぐらい．．．」

「はあ．．．。ほんとバカだな。ほら、一緒にやるぞ」

圭吾はぱつと笑顔になって

机にノートを広げた。

第7話

「これ・・・なに？」

圭吾は根っからのバカだ。

でも、あたしはそんな圭吾が好きだ。

今・・・友達としてだけどな。

「さっきいったじゃん。これは1問目と一緒の公式」

「ほお・・・！・・・。Xの数字どれ？」

「25だよ。ほら、1問目と言ってること一緒だろ」

「うわ、本当だ。」

「いやそんな面倒くさい事で嘘いわないからな」

「だよなーてことは、答えは」――

圭吾は幼馴染で0歳の頃からずっと一緒。

おまけにクラスも全部一緒で

なにからなにまで一緒だった。

けど、あたし達は唯一違うところがあった。

「音々！とけ・・・た、ぞ？」

その時あたしはきつと、

壁に貼ってある写真を見て

ボーっとしてたのだろう。

「・・・音々、あの事、まだ気にしてんのか？」

「・・・あたりまえだろ・・・。あたしのせいなんだから」

「俺もうなんともないし、音々に悲しんでほしいつもりもないんだ
けどさ・・・」

大怪我をしたかしてないか、だ。

圭吾はかなりの大怪我をした。

それも、あたしのせいだ。

中学に入りたてのあたしと圭吾は調子にのってて

いつもチャカチャカしていた。

そんな時外に出たのが運の尽き。

あたしも圭吾も事故にあった。

「ん……。ごめんな。あたしあったかいお茶でも持ってくる」

スツと立ち、部屋から出て行く。

少しいたたまれなかった。

あの記憶が脳内を巡っていた。

「お母さん、あったかいお茶、ある？」

「あら、どうしたの？」

「ああ圭吾がきてんだ。宿題教えてくれて」

「そうなの？ じゃあおまんじゅうももって行きなさい？」

「そういえばもうすぐ期末テストじゃない。勉強、がんばりなさいよ？」

「姉ちゃん、ファイト！」

「そうか……。もうすぐ期末かー……」

「ん……。ありがとう」

階段を上がって突き当たりがあたしの部屋。

部屋はかなりシンプルだと自分で思う。

「はい、あったかいお茶。」

「あざーっす」

「はあ。もうすぐ期末だな」

「ズルズル——（お茶すすってます）ん……。だな」

あれ。圭吾、いつもならあわてるのに。

「あわてないのか？」

「ん？んー・・・キマツ？きまつ？期末・・・期末テスト？！」

「あ、ああ・・・？それ以外にはないと思うだが・・・」

「なあああにいいい！？や、やばいよ！俺！古典とかもう全然だよ！？」

英語も数学も無理無理無理ーッッ

「・・・はあ。部屋もどって全部の教科もってこい。教えてやるから。」

「まじで？！やった！」

「ただし。英語はるかに教えてもらって」

「・・・るかあ！？」

「うん。」

「スパルタキョウシ・・・」

「いいから、とってこい」

「へいへーい・・・」

圭吾は渋々あたしの部屋のベランダから自分の部屋のベランダにわたって

部屋に入っていった。

あたしはるかを呼びに行く。

「るかー。圭吾が英語教えてほしいんだって」

「わかったー今行くー！」

るかはかなり賢い。

英語なんてあたしより断然できる。

戻ってきた圭吾を部屋に促し座らせる。

あ、言い忘れてたけどるかはかなりのスパルタ。

「それじゃ圭吾君、いいですか？この英語はですね」

「音々ーるかこわいー・・・」

「我慢しろ。あたしも聞いているから」

「うー・・・」

「圭吾君、聞いてるんですか？」

「へ?! あ、はい!」

圭吾はるかの前ではずっと敬語。

るかは圭吾に敬語を使う。

あれ・・・けいごばっかだな・・・

「姉ちゃん聞ってる?」

「ああ、うん。聞してるよ。続きよろしく」

「ん。で、ここは」

第8話

「……1時間は経っただろうか。」

それでもまだ、るか先生の英語スパルタ授業は続く。

あたしは、途中で違う勉強だの

読書だのとしているからあんまり害はないが

圭吾はもう半分死んでる状態だ。

まあ、やむを得ない状態……ってのがほんとの正解ってことかな。

「音々……俺、もう無理……」

「まあ、よくがんばったな。るか、ストップ。」

「あ、……俺、またとぼしてた？」

「いつもと同じぐらいだから安心しろ」

「いや……そのいつもがとぼしてるから安心できない……」

「まあ大丈夫。所詮圭吾だから、相手は。あ、ほら、もう8時回ってるし」

そろそろご飯できてるだろ。あたし達も後で行くから、先、いってこい」

「わかった。それじゃテスト勉強がんばって。」

そういうとるかはしたへ下りていった。

圭吾はすぐ床に倒れこみ

半分目が死んでいた。

「圭吾！。大丈夫かあ？」

「全然大丈夫じゃない。むしろ大怪我」

「頭のだろ。」

「精神的にだ。」

「それはあんたの頭がついてってないだけ。ま、あたしも人のこと言えないけどな」

「ああ……やべえ……もう俺眠たすぎて立ってらんねえ。」

「いや、いまのところ圭吾が立ってる様子はないけどな。」

「くそー・・・眠いー・・・」

「もう・・・ほんとお前まだガキだな。おぼっちゃまはもうおねむの時間で中ねー
ばぶばぶう」

「おまつ！俺を馬鹿にしてんのかっ」

「うん（・ω・）」

「いや、うんって！しかも言葉の跡に顔文字付いてたの俺目撃したけど！？」

「気のせいだ。ほら、あたしのベットに寝とけ。気が向いたらどっかのタイミングで起こしてやる。」

「気が向かなければ永遠の眠りに付く。はいーお休みー」

「かなり大胆な殺人予告だな」

「大丈夫だよ、死ぬときは安らかに死ねるだろ。あ、でも少しぐらい痛み感じるか？」

「何で殺す気？」

「そこにあるはさみで圭吾の脳と心臓を開けて殺す。」

「ああー聞きたくなかったー。あーあーあー。」

「はっほんと、ガキっ！おやすみ、ガキっ」

そういうと圭吾は

「ガキガキうつせー・・・」

と言いながらも目を閉じた。

ま・・・るかのあの機関銃的授業聞いてれば眠たくもなるわな。

あたしは圭吾が寝ている間にご飯とお風呂を済ませる。

まあ・・・全部が全部5分程度でおわるから

リビングでネコのリーシャの相手をして、うえにあがった。

あたしの部屋に行くと、圭吾はいまだに爆睡中。

現在21..00ぴったり。

そろそろ圭吾、起こしたほうがいいか？

「圭吾ー。もう9時回ったけどー？」

「んー・・・」

起きる気配なし。

まあ・・・ここに寝させておいてもなんら問題はないわけだ。

あたしは一旦リビングに行って、お母さんに事情を言うといつもと同じように

「あら、そう。じゃあ、音々は座敷の押入れにある布団、部屋に持っていくなさい。」

美智ちゃんにはあたしが連絡いれとくわ」

「んー。ありがと。そんじゃ、もってくわ」

こんな会話がたった。

多分、いや絶対に普通ならば高校生の男女が同じ部屋で寝るなんてありえるわけがない。けれど、これもまあ、あたし達の間では余裕でありえてしまうわけだ。恐るべし幼馴染ってとこだ。

ベットのした横あたりに布団を敷き、目覚ましをかける。

あたしは遅刻しない主義。これでもまだ2Dでは優等生。

まだ21時だけど、小さい頃からもあたしもこの時間に寝てるから

今となつてはこの時間に眠くなるのが普通になっている。

圭吾が夜、起きたときのために、一応紙を置いておく。

けいこへ

気が向いて起こしてやったけどおきなかったんで自分でえいえんのねむりについたんだなとおもい次は起こしませんでしたー。

サーセン。

てことで、かなりまよなかに起きたようだったらそのままねていいから。

そんじゃおやすみーZ Z

ねねより

こんなことを書いて。

あたしも布団に入り、一応声をかけておく。

「おやすみー・・・圭吾ー・・・」

第9話

「ん・・・」

カーテンから朝の光が差し込んでいるのに気が付き
あたしは起きる。ベットを見ると、圭吾はまだ寝ていた。
一回起きたかどうかはわからないけど、とりあえず
ぐっすり眠っている。

本当に永遠の眠りについてたりして。

時計を見ると7時前。

目覚ましは7時になるから、意味はなかったらしい。
目覚ましをオフにて、布団から出る。

今は冬。布団が恋しい。

朝の気温は肌にはぴりぴりときていた。

「さみ・・・」

クローゼットから制服を取り出して着替える。

圭吾は寝てるわけだ、別にここで着替えても

大丈夫だろ、そう思ってあたしは制服に着替える。

森羅学園の制服は女子にはかなりの人気があるらしい。

あたしはあまり興味ないけど、かわいいらしい。

ま・・・あたしはいつも適当に着てるんだけどな。

制服に着替えて、圭吾の部屋に行って圭吾の制服を取り部屋に戻る。
学校にもっていくものは全部そろえて部屋に戻る。

外の冷気は怖いほど冷えていて、地球温暖化とかいってるくせにと
思いながら部屋に戻った。

ベットで寝ている圭吾を起こす。

「圭吾、朝だよ」

声をかけると圭吾は壁に向いていたからだを
あたしのほうに向けた。

「けーいーごー！遅刻してもしらねえよ？？」

「んー・・・音々ー・・・？」

「そう、音々。ほら、制服とってきたから着替えろ。

あたしは朝ごはんにとって来るから」

圭吾は眠そうな顔で「ういーっす・・・」と言い

制服を手にとって着替え始めた。

あたしはリビングに朝食を取りに行く。

あたしの家は皆各自の部屋で朝食を取る決まりになって
片付けも洗い物も自分達でする。

これでもあたしは家事できるし
炊事だってできんだよ？

朝食を部屋に持っていくと

圭吾はボーっとなにかを見ていた。

静かに部屋に入って、圭吾が見ているものを見た。

・・・それは、あたし達が事故にあう直前の写真。

デジカメをもったあたしは圭吾を取るのが好きで
意味もなくパシャパシャと撮っていた。

圭吾が見ている写真は圭吾が一番笑ってて

幸せそうな写真。一番気にいってたりする。

あたしは不意打ちのように圭吾に声をかけた。

「けーいーごーくーん」

「んわ？！」

なんだ、そのこえ・・・

「朝食、もって来たよ」

「おおーサンキューッ！」

圭吾はパクパクと朝食を頬張り
あつというまに食べる。

・・・はえ・・・

「食器洗ってくるわ」

「いいよ、おいといて。」

「ん、サンキュ」

第10話

AM 8・00

「そろそろでるかあ」

「おう」

あたしと圭吾はいつもながら
ほぼ同時に靴をはき
ほぼ同時に玄関をでる。

「音々、ネクタイしまつてないじゃん」

「え？ ああ、別にいいんだよ。」

あたしはほかの女子とはちがって
いつもネクタイをしている。

リボンはなにかこっ恥ずかしくってさ・・・

「そういえばカッターシャツのボタンを止まってるないし」

「別にいいだろ。3段までだし」

「ま・・・いいんだけどな」

圭吾があたしの身だしなみについて
何か言うのはいつものことで。

まあ・・・圭吾も人の事言えた身じゃないんだけどな。

「あー・・・ねむ・・・」

「眠いよりさむい・・・」

そんな同でもいいことを言っていると
学園に着く。あたしの家からおよそ5分程度の場所。

「んじゃ、らしくいくか」

「そうだな」

あたしたちはカレカノとしてこの学園にいる。
でも、それは偽り。偽の彼氏と彼女。

危ない事もあるけれど、これが告白を断る口実にもなり
意外と楽なのかもしれない。

学園の門をくぐると、あたしたちは手を繋ぎカレカノ風に
自分たちを仕立て上げる。なんか結構酷い言い方だけどな……。

「相変わらず皆の注目の的だな」

「つか男子の視線が痛い。」

「あたしも女子の視線が痛い。」

二人で顔を見合わせてクスクスと笑う。

あたし達が仲いいのは小さい頃からだけど

ここの学園にはあたしたちと幼馴染の人はいなくて

皆違う高校に行ってしまった。

理由は……

実はあたし達が行った中学は中高一貫だったんだけど……

その中学は結構遠くて、事故にあった圭吾には不便で……。

怪我は大怪我といっても右足骨折だったんだけど

全治3年とこれまた酷く折れたのだ。

だから、中学よりも近いこっちの学園を選んだわけで

あたしは圭吾と離れたくなくてこっちの学園にきたわけだ。

朝のHRが始まる。

2Dの担任小倉透真先生、通称おーちゃんは
えらいニコニコしながら教室に入ってきた。

「皆おはよー」

「おはよー。先生ゝなんかキモイよー」

「いや朝来ていきなりキモイはないだろ」

「だって朝からニコニコしてるからさ」

圭吾がおーちゃんの異変に突っ込んでいた。

皆それを笑いながら聞く。いつもの事。

「みんなにいいお知らせがある」

「おーちゃんが結婚するとか？」

「おまつ・・・！俺を泣かせる気か！」

おーちゃんはいまだに独り身男性。ちなみ年齢は33歳。結構イケメンだとあたしは思うけどモテないらしい。

「独り身はつらいね〜」

「ちょ、てめだまれっ！今日はお前らにとって
すごくいいお知らせだぞ！」

「なににー？」

「クリスマスの日、みんなで旅行にいけることになった！
もちろんほかのクラスと一緒にだな」

先生の突拍子もないいいこと話に
皆唾然としていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0175ba/>

いつわって？カレカノ！

2012年1月8日13時46分発行